

別表第1  
(表面)

鉄筋コンクリート造の建物の耐力度調査票

IV 学校種別  
V 整理番号

I 調査学校	都道府県名	設置者名	学校名	学校調査番号	調査期間	平成 年 月 日 ~ 平成 年 月 日	III 結果 点数									
					調査者	職名	一級建築士登録番号	氏名	① 構造耐力	耐力度 ①×②×③						
					予備調査者	会社名	一級建築士登録番号	氏名	② 健全度							
II 調査建物	建物区分	棟番号	階数	面積	建物の経過年数		被災歴		補修歴							
				一階面積 m <sup>2</sup>	建築年月	年 月	長寿命化年月	年 月	種類	被災年	内容	補修年	年	年	③ 立地条件	点
				延べ面積 m <sup>2</sup>	経過年数	年	経過年数	年							点	点

A 構造耐力	① 保有耐力	(a) 水平耐力 q	階	方向	構造耐震指標 Is	経年指標 T	$q_i = \frac{(Is/T)}{0.7}$	鉄骨定着部の係数 r <sub>α</sub>	$q = q_x \times q_y \times r_\alpha$	判別式	評点	評点合計
				桁行方向 X 張間方向 Y				( ) 註			1.0 ≤ q 0.5 < q < 1.0 q ≤ 0.5	
	② 耐力	(b) コンクリート圧縮強度 k	試験区分	壁・梁 1	壁・梁 2	壁・梁 3	平均値 Fc	k = Fc/20	判別式	評点	① (0.3以下は0.3とする)	④ (① × ② × ③)
			コア試験							1.0 ≤ k 0.5 < k < 1.0 k ≤ 0.5		
B 耐力	② 層間変形角 θ	階	方向	構造耐震指標 Is	靱性指標 Fu	$F_r = F_u \times \frac{0.7}{(Is/T)}$	θ	θの最大値	判別式	評点	② (② × 20)	⑤ (② × ③)
										θ ≤ 1/200 1/200 < θ < 1/120 1/120 ≤ θ		
	③ 基礎構造 β	種別指数 u	基礎の被害予測に関する指数 p			β = u × p	判別式	評点	③ (③ × 30)	⑥ (③ × ④)		
		木杭	0.8	敷地地盤で液状化が予想される			0.8	1.0 ≤ β 0.5 < β < 1.0 β ≤ 0.5			1.0 直線補間 0.5	
RC杭		0.9	杭基礎でアスペクト比が2.5以上の建物			0.9						
④ 地震による被災履歴 E	過去に経験した最大の被災度				無被害・被災無し	評価	評点	⑦	⑦			
	軽微	小破	中破	大破								

註) 鉄筋コンクリート造架構の上に鉄骨屋根を載せた屋内運動場(Rタイプ)では、鉄骨屋根のRC定着部について検討する。①保有耐力の「鉄骨定着部の係数 r<sub>α</sub>」欄には検討結果の比を、( )内は最小値、又は、平均値を記載して、係数 α の算出根拠を示すこと。

註) 屋内運動場で、β算出時に一方向地中梁による低減係数0.75を考慮した場合には、「□地中梁による低減」にチェックすること。

B 健全度	① 経年変化 T	経過年数 t	判別式(建築時からの経過年数)	経過年数 t <sub>2</sub>	判別式(長寿命化改良後の経過年数)	評点	評点合計				
		年	T=(40-t)/40 =	年	T=(30-t <sub>2</sub> )/40 =	⑦	① (⑦ × 25)				
	② 鉄筋腐食度 F	鉄筋腐食状況	柱		梁		グレード最低値 F	評点			
		グレード	1.0	0.8	0.5	1.0	0.8	0.5	⑦ (⑦ × 25)		
		躯体膨張亀裂、さびの溶け出し	柱	梁	壁	床					
	③ コンクリート中性化深さ等及び鉄筋かぶり厚さ	(a) 中性化深さ a	部位	柱1	梁1	柱2(壁1)	梁2(壁2)	平均値 a	判別式	評点	⑦ (⑦ × 10)
			柱頭	柱脚	梁1	梁2	平均値 b		a ≤ 1.5cm 1.5cm < a < 3cm 3cm ≤ a	1.0 直線補間 0.5	
④ 躯体の状態 D	(b) 鉄筋かぶり厚さ b	かぶり厚さ						判別式	評点	⑧ (⑧ × 10)	
								3cm ≤ b 1.5cm < b < 3cm b ≤ 1.5cm	1.0 直線補間 0.5		
⑤ 不同沈下量 φ	部位	柱	梁	壁	床	グレード最低値 D	評点	⑦ (⑦ × 20)	⑨ (⑦ × ⑧)		
	状況										
⑥ コンクリート圧縮強度 k	相対沈下量 ε	スパン L		φ = ε / L		φの最大値	判別式	評点	⑩ (⑩ × 10)		
	階	桁行方向 X	張間方向 Y	桁行方向 X	張間方向 Y		φ ≤ 1/500 1/500 < φ < 1/200 1/200 ≤ φ	1.0 直線補間 0.5			
⑦ 火災による疲弊度 S	* 同一階6本以上のコア圧縮強度の平均値が13.5N/mm <sup>2</sup> 以下の場合に適用							判別式	評点	⑪ (⑪ × 10)	
	階	壁・梁 1	壁・梁 2	壁・梁 3	壁・梁 4	壁・梁 5	壁・梁 6	平均値 σ	13.5 ≤ σ 10 < σ < 13.5 σ ≤ 10		1.0 直線補間 0.8
⑧ 立地条件	程度	構造体変質	非構造材全焼	非構造材半焼	煙害程度	当該階の床面積 S <sub>0</sub>	被災率 S = S <sub>i</sub> /S <sub>0</sub>	判別式	評点	⑫ (⑫ × 10)	
	被災床面積 S <sub>1</sub>	S <sub>2</sub>	S <sub>3</sub>	S <sub>4</sub>			S = 0 0 < S < 1 S = 1	1.0 直線補間 0.5			

註) 材料試験により使用骨材の塩化物量が0.1%を超えることを確認した場合、③中性化深さの「平均値 a」欄の( )内に塩化物量を記入する。この場合、(オ)の評点は中性化試験結果によらず0.5に読替える。

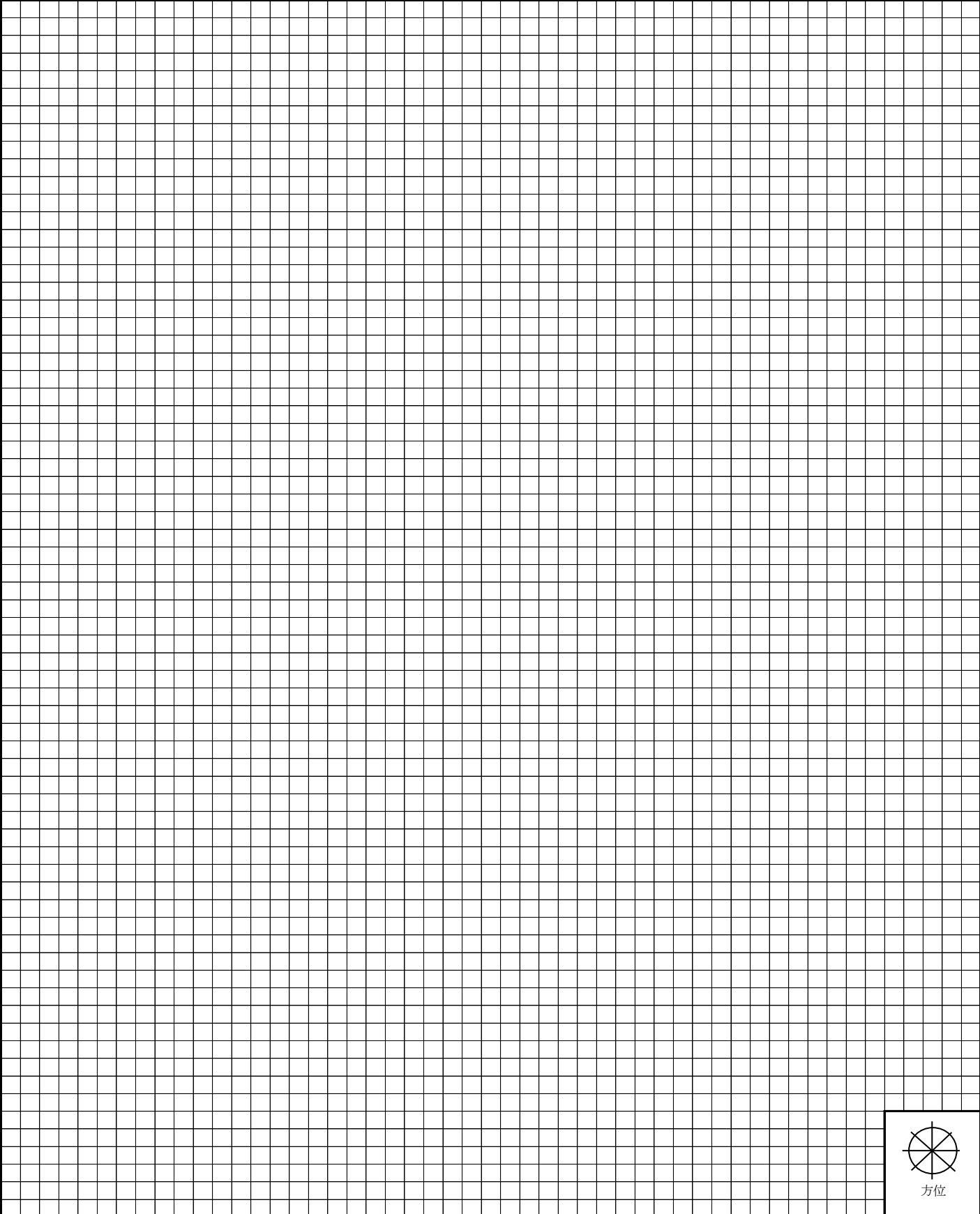

C 立地条件	① 地震地域係数	② 地盤種別	③ 敷地条件	④ 積雪寒冷地域	⑤ 海岸からの距離	評価	評点
	四種地域	1.0	一種地盤	1.0	平坦地	1.0	⑬ = ①+②+③+④+⑤
	三種地域	0.9	二種地盤	0.9	崖地	0.9	⑬ = ①+②+③+④+⑤
	二種地域	0.85	三種地盤	0.8	支持地盤が著しく傾斜した敷地	0.9	⑬ = ①+②+③+④+⑤
	一種地域	0.8	三種地盤	0.8	局所的な高台	0.9	⑬ = ①+②+③+④+⑤

(裏面)

学校名

調査者の意見

1. 調査建物の各階の平面図、断面図を単線で図示し、耐力壁は、他と区別できるような太線とする。
2. 寸法線と寸法(単位メートル)を記入する。
3. 平面図に、コンクリート中性化深さ、鉄筋かぶり厚さ、鉄筋腐食度、ひび割れ等の測定位置を記入する。
4. 余白に縮尺、建築年、延べ面積を記入する。

																															
																														 方位	



方位